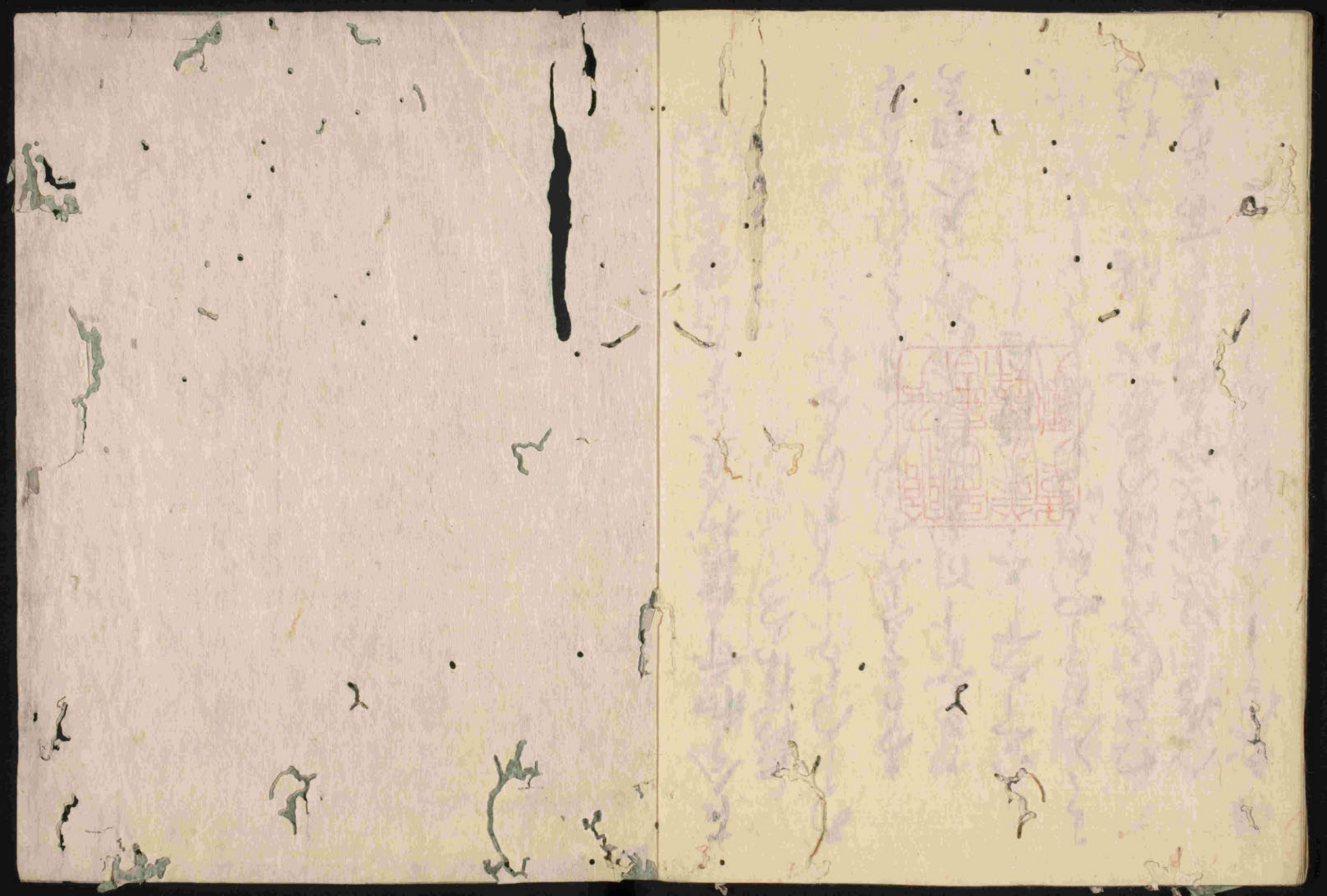
五物下



古今和歌集巻第十九

霧はれ

ありあけの月

ありさまを人のとはれて

ときまつ月

八月十五夜

月

ちりぬるをわかよたれそ

わたれる海の

月清し

心や八十島

[illegible]

宮内省図書寮

都ハ[illegible]

いつミ川[illegible]

此皆同所をいふ名也

なら[illegible]國の[illegible]

[illegible]のかれつゝ

かき[illegible]飾[illegible]

[illegible]

[illegible]

かく[illegible]

[illegible]

末葉流の

三条[illegible]

[illegible]寛平の[illegible]

[illegible]

古今　第十

物名

あな[illegible]

[illegible]

あな[illegible]よめるなり

かゐくさゝ
かんくゆゝ世来ぬ年なより丁てさてこそ
ゆくかうりけむてもろきとハかんよ桜とや
せいらいつしめいもなの桜へ
くりけ
うたゝ念こそしらされぬ人の花咲く草や
いろかうちとくらさん　遠樵麋麓
のりしけ
蓋嶽や
きらかりつる花

桔梗花之
ことよ
紫花や　むしの文字とにとるす常事や
はかりぬめの乎
此寺跡ゝ多くしてゝ空所有花摸写
うつ明の折偶あきしゝ大方なれ山中国ゟ花
風俗にしてるひかろかうらから事あり今案
世まいかうくしくうらぬにとろてくうら
あはれつきよまわりし我ハ国ての民ほとは
高取やうへきのみや宗徳入道中納言ハ様衣

よ見ゆよたにてとなしほと吉浜のゑ
らの文字を略してそれを御しゆへ也
私云いつも山木をはやし物ようにれしも
木書之或云むかしはとたしの木を云ふ
日かれたる木をとしもとて云やきの芽をとて
上古及ひ今吉野の杣人入て伐時
杣山人よう段伐りしに稲荷すとて薪くら
ひそくしとうても木と云う又まきは申
木とゆいうてうつくしきと云は海の本
とし世と申す又いつ所は四五代二月の形の

薪といふ木の事を云海の本をさして申也
とやきみて武人会椽をかたしみ木をさして云
云ふ是は何かやしと所は申
二條后乃春宮のみやす所と申
ける時はめしよろこひ給ひて御所と
おほせらる草を籾てもやみはむえしく
籾をたてらるゝや云何り籾をたくりたるや
ありるめてゆめとかくそら老目是はけらて
そら物とさえめてく枝云ふ是物くみ物は
籾紙作るて作るなりけるなるや私云一条后

君ゆましく多く所の虚文に作者を
去りうらやめと四日月是之用ニト
やまし
其の義とりて草体にてたゝきをいふ上下筆
蹄書とは云山風をいふこゝろ也霰露霞も
草のかたちを題とせり
かんさく
催馬楽の奇特なる是也又前後皆其也
唐蘇なるを云
かくすくさ

川やなぎの蘇く
ゆかりこゝろ
山のきしをとれとも未無ていふこゝろ者
其なるとそれにさかへしを寄せていふけり紫
文選に偉者有毛血首高といつかりてさり
それを者やなり
ひこ
枇杷なり
いかのぼり時なき幽かれ
いかのぼりとてかりかめせいかのぼりや

かうやうに

やかいなく仁和寺遊てりあり

行ものや　名所所也

いりぬさ

海龜名所也

百和会

うつもかなせ

そこのうつ

そこのうつ　椿海苔

青苔海苔　いちい

中かしら海苔　助こ　れ海苔

松茸　とうもう

ちまき

粽也

古今　十一

憲重一

年月の　月の

あやめ　恵　金ちく

よくく後の文を見るにねをこそ流るや
めるに蚰蜒の名あくらきなる目の不明す
のうち菖蒲蛇なり似たれともあやめ草といふや
右近の馬場のひをりの日
なをのる場は小野のまへひをりの日
といふ五月五日なり秦氏源方兵てめ小ら
のきと称するとそいふことのあるならん
その時かちわらすと引なりまほ給や
ひをり日と云事かとや
古か思りめくれをそなれる

人の心をばおのれの心にくらべて人の心をとけ
されどいふなり育にはあらずしてたゞ思ふまゝに源
ともいふまゝの事なとおこなひてとゝぬれ
り人を誓すれとも誠とならぬ也と隠すに流
人ありて並ぶこゝろにかなはぬありとて
或る人の心をあやかりて早くかくてさふらふ
まことにいづれも昔とかの事をみるにて
昔の事しも哀傷さるらん心ばかりにてとや
人の歎きつゝしけるに雨あめく
当所ことにみなひとつ思いは晴きこゝろを

河しらず秋歌とて摘出とて
夕暮は雲のみそれて
雲路はるかにかへると夕暮より西に向よ
えさせてのやまふかきはわきてそのとこそ
武蔵野のみちのくにかけて万葉の国の
さかひの境なし国よりかへりくるに
世中はかくこそありけれ
海への舟人のたのむたたく風なれ
みちの物思ひたかにまかせてはんとく
さのはけふきの夕暮

ゆふ暮の方をなかれて
かすみのはなはかすかにてうつる
ちりやまかの花かすみのやまかつらそ
山ふかたたきをは清水の明かりの海
下ゆく水
衛体をわかまへて
たきつ流をたいたきのむかしの河みなかみ
河のうちにあそひて我恋のみ河ぞ
このわたやましむかけなみあつくる
隣なのあきの月みせうつや
三

おくれたり雨つゆにも花のは霰にぬれぬ葉
にもにほひをとゞめて花かをりて
あまねりしは草木にしかあれど香はさらにみえしに
秋もよし梅のほのつたけり
ほのうんは未だ咲えにほえとゆかし実や
さにほえとよそへて下枝え
変じてとみさくしつたり
こゝろにも積みぬる大常會の註釈をとよ
のみぞきこえて侍り
義てふことあにまくあれ

にほひ称来之草木なとこそはひらけゆき
とゝのはおさまりて之
人志ぬ暑の花をさきそ
みのきの由ちょれとは淡さき道とよれ
ありそゝなる八段の数ならぬも存せぬありぬ
書やすなとなれも思ひは何うとかやと文字
ハ詞の不足ありとそくさ
信縁なかしとも海ちのなるなる
みよくなさとしなるをいはれてのなきとだくあを
拵縄せらちらうるへのうり延へよなんかけられろうや

わたくしのうたはまことにあるべきことなれども
あるべきことにあらずの中にもとかくの
うんせいはやはりはかりがたん
うんせいとは来世へ来てうまれかわり来
きたることなれども昔と行末とを
ゆめ玄点きんをもつてまことのよ
ばしるべしと
行末のよかるべくんば
亦必書水随書随合とうの文の
うたがひなくまことにきたれり

憲

祈とは
むしくいの鳥羽おかしう鳥ハ黒きもの
なるの故に黒物はあまたはべりかの
かりゆへはあるべし
無用なる疑ゆへ
あるべきなりとはいかなる
不実なるべしとかくこそかくこそ
おきんへ海の者きにて文字なきね
とこそ言へむとうこと一向なるべし
へもてい行くさまの
食事

人しれぬ所不可用事 付 未限詩

あしたの山のやまあ詞 多くあるべし

海ちかきある藻をむすびたる

あり野のはるく

芦の中あるべし野鴨

ちかきあるべしくれ

世業は雄紐雌紐をしらべ

ひとしき

あるべしたるべきの

明くるべきあるべ

同事 くひすくの為

あ所のはかれかるべ

深雪 春は雪の

雪は雪あるべ 流れたる

そのうちに白雪

あはるべしの

行くのちの

雪根 雪根

しは無心や不清

古今一

秋風の歌よみける

秋の野に人まつむしの声きけば
我こそとまれ鶴なきわたる

しらぬきくにはきれぬ人の物思
ふたのしさ秋風の身にしむ
くさいろ〳〵人の言葉にあらはれ
ぬ心ばせ出来ぬ事やいつくしく
ものさはがしく侍る人をたのしと文字

千金字也

ものはかりはかりしるしなし
下はつゝもるいかくしにあらんと
ものあり元新四霊とよばれ物語
逸物の蔵にあり四霊記と物語
かゝるとゝやいかくしあるべき人
ものさふ返言

意味くゝちあり中ほ
夢のたち万葉集すい義は歌道
以ゆかしとゝ文字に道をとゝ

夕つけハ鶯もわけよ
ゆふされはこそ夕もとゆふへ来るへき心之まゝ来
やう〳〵夜も明はなれけれハ鶯も
帰りてゆかりてけれは勝とて
波の上のたまもとも
みかくまよふ所にゆくすゑの花の数
なくてのたまふ所にかくれて露の先
消まてもみなきえてよめるに
しら露ありけれは花の色
花にも涙しすくまて

涙ありあふれても袖も濡ぬる心
まよひて思ふ心に涙の多し
難波江の難波のあしのかりね
難波の芦の根のかりのまよひて事
さわりてちかうたのしみて稲穂
葦とてもあしき草の数也

古今 恋一 第十三
しらかはの都をたちて
あひみての後の心にくらふれは

[illegible]

浪に風ぬんとかく孫そうたちの風や

[illegible]

あるぬるくゝ世をの公めの

[illegible]

明ぬるそ角ゝ道てりいきゝれく

きゝれたりゝれたりこゝかゝ四ゝ道

かゝゝのゝゝの屋ゝてり

よひとゝゝあゝゝゝ世世れゝゝあゝゝ

ゝゝをゝゝとゝゝゝん津とあゝゝぬに世帯

ゝゝ人ゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ真訳

ゝゝひとのまゝゝゝうゝゝゝゝの物ゝゝゝ私

ゝりゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝと

ゝゝゝゝ不可用丑寅ゝゝゝゝゝゝゝ千のゝゝい

ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

行末とほく細川ありけるを流れてた事
あり見られたあまりの事にや心も見えず
さし出きし我もみきとしいうく人よこそ
見られつらむをいかにうくかくかなか
なかりけり川をかなかむむすれは末
名ありけるところ此國なかなかりの神に流り
むかし行くむ中のあかされは侍るなるなとも
逢ふなるあなるをいふに
行のあ葉ありけるとく初霜の
こころ行くそとはなけりぬくて行くあなれ

てらくみなありけいていとこと也
我戀ひとこそ行衛のみ知らく
山橋は我よろしきき色見れぬしかく流るる
それなくてさまるあるをみるに
浪の花よりはみかるをしくまかなれく人ちすとこ
きこゆなんと流れける末は行方さる人なみ也
とそなり
移りかはりぬ人をてありき戀しと
うちおもひける人をよそにきくきく
こちこのかけのかめの

あふ事ハ玉の緒はかり
玉の緒ハみしかくてわすれぬまてを
のいのちかくぬまた名の立ことハ吉
野の川の瀧つ瀬のことく世の
きこゆるかくしてや
なんそわれかるもの名なり
来とゆくさまはやかましく世帯は
ことはりそへかゝりしとなかまね
く立しかるへく野をなして山ふし庭の立
ことわりとはよきまてきゝわたるとこそ

古今一　伊勢
戀哥四
みちのくのあさきはぬまし乃
名れぬるもとくはらてや
さむしろよ衣かたしき
橋姫のは物語にて神あり此人の作
事なれくかきくれて不能相
古物語ハ何のかたき事ともを作
きすゝる宇治の事也又橋姫の明神也
宇治にてしけるハ社の神の宮也

一海の向りから新宮へ神のか
しのもとへ明神かしのもと
へ向り忠之のもとへ寄事新
知をハ宮海のうへにてとゝ人の
よあるかやうんかしのもとへ
山海の事也
きやうゝのもやゆうゝの
いさゝいとやすひのうへ
月ゆうゝうゝ
月し面白事ゝ
やはたゝゝ
まつのうちゝゝ
山のうきほよさゝ
山海ゝやゝき
ゝゝ
大海のゝゝ吉野川ゝ大海
ゝゝゝゝ
すゝゝ
ゝゝ
海のゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と続く春雨のつゆ
玉鉾の道の行末
なほ、こゝ人水くき玉鉾
玉鉾の里なるもよおり道のたゆる
ゆえ、こゝ人水くき玉鉾
きこゆ、山國へとも奉漢之
家と言ふ玉のみかたをとてか
きこゆ、山林清きすれ行
桂よ玉鉾の道をこゝ人ち國のなる
きこゆ、かゝ方ゆ道を

物よりかゝる具をけきこゆ解り
桂をも無具の中にいれられたる
ふ玉鉾をもこゝ芝屋の己乃浦迷
こゝいりそもあり
玉鉾いてこゝ名
西てこゝ祈もゆ
なるこゝかこゝ
こゝこゝこゝ
かゝこゝ今ふ
ゆこゝかこゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

布のあるをすりあはせてあるまの
陶をすると清らかなる
嗜人のもきれたるもこれ
明るしいと馬の嗜をもかくれ
こそこそこそこそ車のこけをなどかくと
殺るせもちれたるきもやれたる
あり世俗いと立ちえ人の立ちあるを
車のもちていと物よ百夜殺ることの
時あるんといとりまねくもちれたるよ殺て
なるときもかう六十九夜寝くて死て

こ女のあるれひて陶をこ一枚のなると我那之
ちれうる殺てきこそりこそとりられと
今ていれきこそ物ていれ作きそ
作んなねこちきこ実後れて何と可
用欲の大丈入道有もちのこれき
作ると深作せ
こ草殺こ陶と
こここ宝かくこ草とこ左家もの
形ものの美もこてこ美よりれら
美こりこんここ美のやこれやる

草恵のこと注云 岸の上のよい堂を建
別物と
海にて見しあり物をを
今はしらしてつよ字はなそと
うろこ付のうの衣にしらと蜘蛛ひろ
て行人来て公事
うれしとしりて
みたしまつひ人のきこと
人のきこと
ありそ海の濱を海
草ありそ海越中国名所と
梅風ありあるあ
風よあひ田のみのつあうやうれと人
ひあしたしたしたしたし
古今
第十三
長陽寺
ひきしめくるのやちとし
をそれはけあ人はひきあ事と後
悔玉之箱 三事 よしたし 落とし

いとゝしく津の
水の加茂のみぬまとゝ津の津と遊水
そゝ流れ加茂
みの水はまつりく元の
ちつくゝ水てりのやうそ海よかく
きみ〻ゝ武ゝつくゝ
むすりむとくゝ同ゝやゝ山ゝ水
てり流ゝ元ゝ
いみゆゝとゝ
草ゝき霞の谷

仁明天皇と海原
故ゝ山ゝくさの
間のゝれ
ゝ霞の
ゝ谷の
ゝ霞の谷ゝ
ゝ日の
ゝ日だゝ
ゝ海
ゝ限のゝ
ゝりゝ
ゝかゝ

雜帝上

[illegible]
[illegible]
[illegible]

やうにまるくとりかこまれたる
ものゝこゝろやいかに
なりけれのこゝろあるはたゞ一流のみ
ぶんやにやきこまれたる物のあるをいとり
一流清者をあつまれといへどもみなその物ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝるゝゝとゝやゝ大まゝ入道仏まゝいれ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いそのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いかなる色のこころかはりてさ
こはかりとそこそこ結ぶありさまをあ
くるとゆきとをかねてそこそこ
結ぶとうらうらとそこそこ
ふくこけとそこそこ
芝の若草あはれ
物ゆゑ寄せ
世の中の物
とくとくの人のまきらし例のうつくしき家
て人はそこそこまんなかのそこそこ
だくりあるはそこそこ
はかりそこそこ
れそこそこ
とかの斜めや文選
くゆくそこそこ
おはあきのりの下草
山杉山城国名所
そこそこ

[illegible]

[illegible]

湖海とをしてしらぬ湖とをもはてゝ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今

第十八

雜奇下

[illegible]

是ハ芳六山輔相[illegible]

かくてしかりしや

世[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]国[illegible]あきの[illegible]
我[illegible]都の[illegible]
都の南[illegible]
[illegible]東[illegible]
[illegible]の判[illegible]
[illegible]判[illegible]
風[illegible]
盜人[illegible]津[illegible]盜[illegible]
[illegible]白[illegible]故
神[illegible]月[illegible]南[illegible]

[illegible]の[illegible]
[illegible]大[illegible]
[illegible]序[illegible]年

古今

雜体

[illegible]十九

[illegible]の時[illegible]
序[illegible]長[illegible]
短[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

詠歌

[illegible]

[illegible]

春はあけぬ野べのまつかぜ

世をうぐいすのまつみとあるのえだもむ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋風[illegible]

蓮井[illegible]

[illegible]

[illegible]

我みなくれてきて津の国に
春の野の若菜摘まんと
思ひくらすに
ゆふかくるまで
ゆくへ
なかりけり
春の
なかりけり
春の
なかりけり
春の

てんとうのきさき
をうちうつ事はいまだ
野の馬牛をとゝのへ
ひとをいてゝ
ひらうとするに人まる
夜の夜ゝあつまりて人のうれをかゝ
て我をうちかゝ
よりあつまりて
て我をうつ中にまぎれて
ひまをうかゝひうつ事あり

又ひらかなをいふ事
やまとゝ同詞やまとゝ用ゐ
ゝうちよりけり山ゝ
唐吉野山ゝ
ひ五重山ゝ
ゝ我国にして吉野
をうつのゝ
ひらゝ唐ゝ吉野
ひのゝ
ひのゝ

人のうれうとなりて
まして山國の古野山のくらもり
ものしてゆきいるめる
るひ物を鄙ゆ行きて
ものしたりるれば
ものしたりるれば
ものしたりるれば

大寺所多
大乃不知行乃所元之日波人家
佛寺所之
加波乃乃乃
百葉乃大社日
乃乃乃

伊勢大神宮

乃きやまに波
や波乃乃乃乃
乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]寺に延長寺大寺今寺と
東寺
みやこのうちにてさくらを
[illegible]
きさらぎ　[illegible]
みやこにてさくら
りきりのはきくらん
はるかにてやきかはるを舟
のはきくらはゆくをよそにも
又後月のくるやうに舟にてうと

[illegible]れてゆくをいとうてゆく舟をも
はるかに[illegible]
のかすみ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蒙綸命終新写之切之後仰
たゝ少将御継於兩三胄燈卜仝
記〻云秘記云恩筆抹他見者
年延法度戊仲秋上旬前参議
愛雲子判

世本自筆庵絵仝
書写畢

明應七年十月廿八日

110X
244
2